

ネットワーク時代の大学図書館：アメリカ大規模図書館見学記

附属図書館情報サービス課参考調査掛 山中節子

今回はスタンフォード大学について報告したが、今回はその続編としてカリフォルニア大学バークレー校、ロサンゼルス校を中心に報告したい。

1. カリフォルニア大学の図書館システム-MELVYL

カリフォルニア大学はバークレー校、サンディエゴ校など9つのキャンパスからなる州立大学である。

バークレー校の創立が一番古く1868年、カリフォルニア大学が1919年、最も新しいアーバイン校、サンタクルーズ校の創立は1965年である。

カリフォルニア大学ではMELVYLという巨大な図書館システムを構築している。9つの大学全体の蔵書目録や、学内者向けにカレント・コンテンツ、MEDLINEなどのデータベースが提供されている。私が訪れた昨年7月現在では、MELVYLを管理する機関はDLA ("Division of Library Automation") といった。

このMELVYLの目録は、1920年代の図書など、日本の目録では探しにくい資料を検索するときに役に立つ。もともと蔵書冊数が多いうえに、特殊言語を除いて遡及入力がほぼ終わっているのも、レコード数が多く、資料のヒット率が高い。

MELVYLには、カリフォルニア州立大学やスタンフォード大学も参加している。

各校は、MELVYLとは別に独自のローカルシステムを持っている。図書の貸出・返却、受入システム、OPAC (オンライン目録) などがローカルシステムの下で運用されている。バークレー校のOPACはGLADIS、ロサンゼルス校のOPACはORIONという。

バークレー校を例にとると、システム関係にはプログラマー、エンジニア、ライブラリアンなど約30人のスタッフが従事している。

当初、なぜ同じカリフォルニア大学で総合目録とローカル目録があるのかがよく分からなかったが、どうも日本の学術情報センターの目録 (NACSIS-CAT) と、東京大学や京都大学の各目録 (OPAC) との関係に照らし合わせて理解したら良いようだ。例えば、利用者自身が貸出更新をしたり、複写依頼したりする場合は、MELVYLではなく、各校のOPACを通じて行うことができる。

2. バークレー校の中央図書館

バークレーはサンフランシスコの対岸に位置する。

日本人観光客も目立つキャンパス内には、広大な敷地に様々な様式の建物が並んでいた。スタンフォード大学の統一美を見た後だけだけに、バークレー校の学部毎に異なる建物を見ると、なんだかほっとさせられた。

バークレーでは、東アジア図書館の石松久幸氏に案内していただくことができた。氏はここを訪れる日本人図書館員の案内を一手にしてくださっている。私としては、東アジア図書館だけを案内してもらったつもりだったが、こちらの意を汲んで下さったのか中央図書館や他の図書館も案内して下さった。本当に親切にしてくださいましてうれしかった。

中央図書館としては、研究図書館のDoe Libraryと学部生用図書館のMoffitt Libraryがある。他に大小様々な主題図書館が約40館ある。小規模の図書館は整理・統合していく方向にあるらしい。

Doe Libraryでは模様替えされた参考図書室と新設の地下書庫を見学することができた。

書庫には大学の構成員だけが入ることができる。地上部分は芝生になっており、外から見ると緑がまぶしかった。

地下書庫といっても自然光が入るよう工夫がされており、多数の閲覧席が設けられている。各机には電源・情報コンセントが付いている。コンピュータ化されている一方で集密書架が手動式だったのは、パークレー校らしい合理性のあらわれかと思った。

また、弱視者用に通常よりも机が高くなっている閲覧コーナーが設けられていた。閲覧室には、車椅子用に高さが調節できる端末台も設置されていた。これは日本製らしい。

書庫には、キャレルの上に6,7冊の本が置かれているコーナーがあった。これは、申し込んだら個人で決まったキャレルを占有することができる制度で、図書もそれ用に貸出手続きをすることで、机に常備しておくことができる。

参考図書室には、参考図書のほか、検索用のコンピュータ端末が50台ほど設置されていた。端末を置くにあたり、参考図書は3分の1に減らして書庫へ納められたとのことである。レファレンスの力点が冊子からデータベースに変化してきたことの一端を見た気がした。

Moffitt LibraryはDoe Libraryと地下で結ばれている。主として学部生用の指定図書とコンピュータ端末が置かれている。端末は200台ほどあるらしい。また、講習会室も別に設けられている。スタンフォード大学、パークレー校と見学してきて、研究図書館の規模の方が大きく、学部生用図書館に想像以上に本がないのに呆然とした。



Doe (Main) Library

3. ロサンゼルス校の中央図書館

ロサンゼルス校というより、UCLAと言った方がわかりやすいかもしれない。巨大都市ロサンゼルスの北西部、ウエストウッドという街にある。

想像通り大きな敷地で、想像以上に重厚な美しい建物が並ぶ緑にあふれたキャンパスだった。日本から持参したガイドブックには地図に「正門」と書かれていたのだが、いざ現地に着いてみると門がなかったのには驚いた。

ロサンゼルス校では東アジア図書館の三木保子氏にご案内いただいた。三木氏は中央図書館など他の図書館員の方に事前に予約をとっておいて下さり、当日はずっと付き添って下さった。こちらの身になって万全の準備を整えて迎えて下さり、とても感激した。

UCLAの中央図書館は学部生用のCollege Libraryと研究用のResearch Libraryの二つである。

College Libraryの建物は1929年にキャンパスが現在の場所に移されたときからある建物で、重厚で美しい。1994年の地震で被災し、3年間閉館していた。現在は内装なども復元され、創建当時の面影を伝えている。単に復元したのではなく、コンピュータ関連の設備を新設するなども行われた。

地上3階地下1階建てで、2階閲覧室に入っただけでレファレンスデスクがあり、種々の参考資料が置かれている。本がたくさんあることにわけもなくほっとした。

この閲覧室の机にも電源・情報コンセントが1席ずつに備え付けられている。書架、閲覧机、椅子、端末台などはデザインが統一されていた。

携帯用パソコンが利用できるように、閲覧机にコンセントを設けている例は、この後行ったカリフォルニア工科大学や、サンフランシスコ公共図書館のような公共図書館でも、新しい図書館では必ず見られた。そして、どの図書館でも、端末の持ち込みが可能な場所と不可能な場所が特に区別されていなかった。キーボードをたたく音などの雑音が、他の利用者の迷惑にならないのか、見学中に何ヶ所かで質問した。ノ

ート代わりに授業中も使っている学生が少なくないので抵抗感がないこと、閲覧席に余裕があり隣の音が気になりにくいことなどの理由から、特に問題はないとのことだった。

UCLAのCollege Libraryのプリンターはカードで支払う方式で、ゼロックスコピー機と共通して使用できる点が便利である。プリンターをカード支払い方式にしている例はバークレー校の分館でも見かけた。スタンフォード大学でもそうだったが、無料から有料化、カード方式へ切り替える傾向があるようだった。

また、2階には5,000以上のビデオやフィルム資料を閲覧できるMedia Labも設けられている。

1階には書庫や学習室、CLICC(College Library Instructional Computer Commons) Computer Centerがある。ここでは学生がコンピュータ端末を自由に利用することができる。端末台は閲覧室と同じく別注である。赤い木製のなかなかかわいいデザインだった。3階には演習室がある。

コンピュータ関連の施設を作るに当たり、建物内に入っていた学部生に関係のない図書室や事務室は他に移動したということだった。

地下書庫の書架も閲覧室と同じデザインだった。ソファも置かれていて、学生が寝ていた。書庫でも快適な空間が演出されている。

ロサンゼルス校の閲覧室にも、車椅子用に高さが調節できる端末台が設置されていた。コンピュータ化されているといっても、従来の図書館サービスで培われてきた障害者サービスや、気持ちのいい図書館空間を作るという点がないがしろにされていない。

地下には書庫のほかに、米国内でも有数のコレクションを持つ "Film & Television Archive Research and Study Center" があり、見学することができた。いろいろと面白いお話を伺うことができたのだが、アーカイブ資料も含めて所蔵資料はまずOPACで探すと、実に何気なくおっしゃったことが印象深かった。どんな資料もOPACで検索できるというのは実に基本的なことなのだと実感した。

4. 参考調査部門の利用者教育

ロサンゼルス校では、Research Libraryで参考調査部門のMarie Waters氏から利用者教育についてお話を伺うことができた。

にこやかに迎えて下さり、まず渡して下さったのは、参考調査部門のホームページのカラーコピーだった。

レファレンスカウンターは月～木曜は午前10時～午後7時、金曜日は午前10時から午後6時まで開いている。

アメリカでは専門分野毎に担当が分かれているとかねてから聞いていたが、主題別の担当者一覧を見ると、一担当者が幾つかの主題を担当している。例えば、ある人の担当は

"Comparative Literature" "Economics" "Folklore & Mythology" "French" "Philosophy"

"Scandinavian"である。案外、担当分野が広い。

利用者教育プログラムは、図書館の使い方一般を説明するもののほか、ORIONやMELVYLの基本操作、MELVYLで利用できる様々なデータベース、CD-ROM、インターネットの講習会、各クラス毎に申し込める説明会などがある。この説明会では、ORION、MELVYLなどのデモ、館内ツアーなど希望するものを選択することができる。やはり、年度当初の10月頃の申込みが一番多いということであった。

増加するデータベースに対応するのはアメリカの図書館員の方も大変のようだったが、利用者とともに学ぶという姿勢で取り組んでおられるというお話だった。



閲覧室（高さが上下するパソコン台）

5. 東アジア図書館

東アジア図書館は主に中・韓・日の文献を扱う図書館である。

パークレー校の東アジア図書館は、日本語資料が32万冊あり、海外の図書館では最も多い。中国語資料はハーバード大学のイエンチェン図書館に次ぐ規模である。三井文庫(江戸期版本)、村上文庫(明治期小説初版本)などの貴重資料も所蔵されている。村上文庫は早稲田大学と共同でマイクロフィルム化され市販されている。

2年後に新館を建設する予定で、寄付を募っている最中ということだった。

実はこの図書館を訪ねる時に、うかつにも持参した案内図をホテルに忘れてきてしまった。それで、仕方なくキャンパスの中をぶらぶら歩いていると見覚えのある建物の前に着いた。中国風の狛犬が入口の両脇に立っている。名古屋大学の方が館報に載せていらした写真と同じだった。それで、無事に目的地にたどり着けたことがわかった。ミーハーな選択が幸いした。

ロサンゼルス校の東アジア図書館は研究用図書館の建物内にある。日本語資料は約14万冊所蔵されている。分類は、1972年以前はハーバード大学のイエンチェン図書館分類、それ以降はアメリカ議会図書館分類が採用されている。図書館の詳細は、三木氏が『図書館雑誌』98年1月号に詳しく紹介しておられる。

当たり前といえばそうなのかもしれないが、パークレー校、ロサンゼルス校ともに、書架に中国語、ハングル、日本語文献が混配されていたのが新鮮だった。

どちらの図書館でもE-MAILでの質問がアメリカ国内だけでなく、世界中から寄せられているということだった。言葉の障壁から直接日本に問い合わせないで、アメリカに問い合わせるという例があるらしい。WWWで日本と繋がっているとはいえ、文字コードの問題もある。

ロサンゼルス校では日本語資料の目録担当者であるMarra俊江氏に、OCLC-CJKの目録作業を実際に見せていただいた。これは日韓中国語のための目録で、試みに大江健三郎で検索して下さったところ、ちょうどハングル語訳版があ



東アジア図書館(パークレー校)

った。画面には、ローマ字、漢字、ハングルが並んでいた。また、当然のように件名をきっちりとおられたのも欧米の目録らしく印象深かった。

アメリカでもWWWの発達によって、国内で得ていた情報を、直接日本に求める傾向がでてきたようだ。学術情報センターの"NACSIS Webcat"は、やはり便利とのことだった。今のところ、料金決算が難しく、アメリカの大学との海外ILLは実現していないが、潜在的な要望はお互いに高い。

実のところ、私はこの研修に行く以前は、日本語が文字化けするなどの問題をほとんど意識していなかった。WWWで発信された情報は、国内だけではなく国外にも流れているということも、本当のところわかっていなかった。京都大学でも、電子図書館で貴重資料などを発信している。海外の日本研究者に向けてどんな情報を発信することができるのか、それを考えるためにも、海外の日本関係の図書館員との交流は大切だと感じた。

ところで、ロサンゼルス校でいただいた図書館案内には、"Japanese"の参考質問先として、東アジア図書館の三木氏の名前が明記されていた。他の大学のホームページなどでもそうだったが、各種の利用案内には、担当者の名前が明記され、分からないときにはどこへ行ったらよいかが、主題別に説明されている。利用者の視点に立って説明がなされており、見習いたい事例の一つであった。

